様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年４月１３日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７～２０１０
課題番号：１９５３０４２９
研究課題名（和文）　市民社会のなかのハンセン病問題
——家族・社会復帰者・再入所者のライフストーリー
研究課題名（英文）Issues with Hansen Disease in Civil Society: Life Stories of Patients' Families, Socially-rehabilitated Patients, and Reinstitutionalized Patient

研究代表者
福岡　安則（FUKUOKA YASUNORI）
埼玉大学・教養学部・教授
研究者番号：８０１４９２４４

研究代表者の専門分野：　社会科学
科研費の分科・細目：　社会学
キーワード：　ハンセン病，差別，トラウマ，聞き取り，ライフストーリー

１．研究計画の概要

わが国のハンセン病問題は，患者たちに「療養所」への収容を強いた「強制隔離絶滅政策」として特徴づけられる。しかし，いったん，「ハンセン病療養所におけるハンセン病問題」から「市民社会のなかのハンセン病問題」へと視点をずらしてみる。そのとき，ハンセン病への偏見と差別による被害を市民社会のなかで被ってきた存在として，《家族》《社会復帰者》《再入所者》たちが浮かび上がってくる。彼ら／彼女らから，そのライフストーリーを丁寧に聞き取ることをとおして，「市民社会のなかのハンセン病問題」のありようを浮き彫りにすることが，本研究の目的である。

２．研究の進捗状況

われわれは，ハンセン病に罹患したひとたち，その家族たち，あるいは，ハンセン病療養所の医師・看護婦・職員としてこの問題にかかわってきたひとたちを対象に，ひたすら「聞き取り」調査を精力的に実施してきた。2010 年 3 月末現在で，療養所の入所者（再入所者を含む）91 名，退所者 25 名，家族 21 名，療養所の元職員など 4 名，行政職員 2 名，弁護士 3 名からの聞き取りを成し遂げている。これだけの《集合的な語り》の収集をとおして，たとえば，療養所を訪ねて入所者から聞き取りをすると，あるひとは強制収容にたいする〈怒り〉を表明し，あるひとは療養所に入所できたことで救われたと〈感謝〉の気持ちを口にするという，一見対立しあう言明が，じつは，「癩／らい予防法」体制のもと，ハンセン病を病んだひとに作用した社会的制度的な力は，当人の意思にかまわず強制的に引っ張ってきて療養所に閉じ込める《収容・隔離の力》だけではなく，社会から患者の居場所を徹底的になくして，患者みずからに入所を望ませさえする《抑圧・排除の力》があったということを，背後の文脈としてもっていることがわかってきた。その，社会のなかの《抑圧・排除の力》が，いまなお消え去ってはおらず，家族，退所者にさまざまな困難と苦悩を与えているのだし，ハンセン病療養所の入所者たちと外の社会との結びつきの回復を妨げているのではないか，というかた

ちで，さまざまな語りを統一的に理解する地平が拓けてきたといえる。

３．現在までの達成度

① 当初の計画以上に進展している。

2008～2009 年度に，国立ハンセン病療養所のひとつ，群馬県の「栗生楽泉園」の入所者自治会から，『栗生楽泉園入所者証言集』の編集を依頼されたことは，本研究の進展にとってきわめて幸運なことであった。当事者の全面的なバックアップがあっての調査研究であるので，調査遂行上想定される多くの困難があらかじめ除去されている状況で作業を進められたことは大きい。2009 年 8 月末に『栗生楽泉園入所者証言集』全 3 巻を出版したところ，多くの新聞やテレビなどで取り上げられもした。『証言集』自体は，聞き取りの対象としては入所者を主体とするものであったが，ひとつの療養所を舞台に，数多くの語り手の証言が得られたことで，《ハンセン病問題の全体像》に迫りうる手がかりが摑めた。

４．今後の研究の推進方策

前述のように，ひとつの療養所を舞台に，《集合的な語り》を記録していくことには大きな価値があることがわかったので，研究計画最終年度前年度応募に申請し，幸いにも，「ハンセン病問題の《集合的な語り》の記録化の追求」の研究課題で，あらたに，基盤研究（B）をいただけることになった。「療養所の中」か「療養所の外」かにこだわらず，つぎの『証言集』の編集・作成に精力を注ぐ。当面は，かなり入所者自治会の協力を期待できる，鹿児島県の「星塚敬愛園」を舞台に，聞き取り調査を進めていきたい。

５．代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 福岡安則・黒坂愛衣，2010，「『らい予防法』体制下の『非入所者』家族――ハンセン病問題聞き取り」，埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第 7 号，31–63 頁，査読無

② 黒坂愛衣・福岡安則，2008，「病気でないのに 15 歳まで入所――朝鮮半島にルーツをもつハンセン病療養所入所者の子どもからの聞き取り」，埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第 5 号，151–166 頁，査読無

〔学会発表〕（計 3 件）

① 福岡安則，「集合的語りの記録化の必要性――『栗生楽泉園入所者証言集』を編む」，第 25 回日本解放社会学会大会，2009.9.5，長崎ウエスレヤン大学

〔図書〕（計 3 件）

① 谺雄二・福岡安則・黒坂愛衣編，2009，『栗生楽泉園入所者証言集 上』創土社，474 頁

② 谺雄二・福岡安則・黒坂愛衣編，2009，『栗生楽泉園入所者証言集 中』創土社，446 頁

③ 谺雄二・福岡安則・黒坂愛衣編，2009，『栗生楽泉園入所者証言集 下』創土社，477 頁